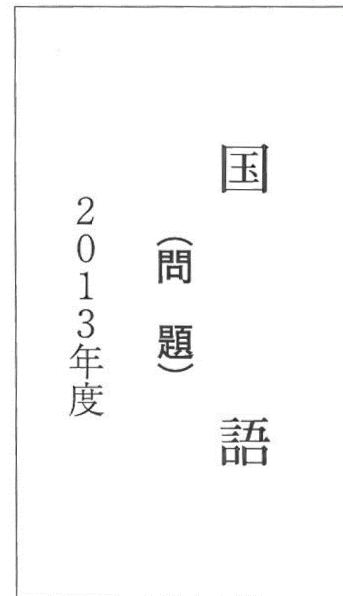




〈2013 H25071119〉

注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 試験開始後、マーク解答用紙については、受験番号を確認したうえ所定欄に氏名のみを記入すること。
- 5 マークはつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残さないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章は、別役実が二〇一二年に新聞紙上に発表したものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

或る日、私のところに、筆太の平仮名で「やめえ」とタイトルを付された、上演台本と覚しきものが届いた。作者は私になっている。心当たりがなかったのでやや戸惑いつつ頁を繰ったのだが、中を読んでみて気がついた。

かつて私は、「病氣」という戯曲を書いたことがある。それを或る東北地方の劇団が上演したいと申し出てきた時、私は「そちらの方言に直して上演したらどうですか」と提案したのであり、送られてきた台本は、その方言版だったというわけだ。

「なるほど、病氣だからやまいで、それがなまってやめえね」と、私は納得したが、同時に、「やめえ」と音韻化された言葉の、奇妙な迫力に感心もさせられた。「病氣」という、単なる文字として納まるのではなく、「やめえ」と「止めえ」と聞こえるせいもあるが、皮膚をぐぐり抜けて、こちらの体内にもぐりこんでくる気配がある。

私は私の本を地方で上演する場合、「そちらの方言で」と提案することが多いが、それでなくとも今日、地域の劇団がその地域の方言で上演する舞台が増えている。そしてこのことは、近代劇が厳しく方言を排除してきた歴史のことを考えれば、かなり異例のことと言えるだろう。

一時期、各国の公共放送が公用語での全国放送を開始した場合、地域ごとの方言が、一段と濃くなった、という事例が社会学者によって報告されたことがあった。そしてそれは、各地域がそれぞれ無意識に内包しつつあった「文化」(もしくはその前段階のもの)に対する、
甲 のたまものであったろうと言われているのだが、今日の我国の方言演劇にも、同様のことが言えるに違いない。

ただ我国の場合は、NHKが全国放送を開始した時点では、わずかに沖縄にそれらしい反応があっただけで他にはなく、地域ごとの「文化」を防衛しようとする活力は、既に失われたのではないかと言われていたが、今日ここへきて、
乙 の影響と思われるが、演劇がそれらしく反応しはじめた、というわけである。

公用語(標準語)で書かれた戯曲と、その地方の方言で書かれたそれを、同じ劇場で上演し、観客の反応を見てみれば、違いはハッキリする。前者の場合、観客は頭をやや前方に傾け、きき耳を立て、発信された言葉を読解しようとする風だが、後者の場合は、背もたれにゆったりと体を預け、言葉のリズムに体のリズムを合せ、そのやりとりを単に楽しんでる風に見える。

その地の方言であるから、言葉の通りがいいというだけのことではない。方言というのは「肉声」であり、手触りの確かなものであるから、やったりとったりするだけで、何事かが成立した感覚が得られるのである。

かつては、こうした「肉声をやったりする現場」が、我々の周辺にいくつもあった。いわゆる「井戸端会議」があり、「床屋談議」も「銭湯でのおしゃべり」も、それであつたと言えるだろう。地域ごとの最も内密なコミュニケーションは、こうした場でジョウ成されていたのであり、そこからその地域の
丙 も生れたに違いない。

「それに代るものとして、テレビのスタジオ番組が出来た」というのは、ほぼ確かであると私も考えるが、果してそれがかつての「井戸端会議」や「床屋談議」と同じ効用を発揮しているかと言うと、大いに疑わざるを得ない。

そこで採り上げる問題は似ていたとしても、こちらでは著名なコメンテーターが公用語でそれを話し、それらしい解答を出すことになっているからである。ただし、ヴァレリーが「人間は、答えのわかっている問いしか問うことが出来ない」と言っているように、そこでの「問いと答え」は、ありきたりの線上の堂々めぐりに過ぎない。

一方、「井戸端会議」や「床屋談議」の方は「肉声」という手触りのある言葉でやりとりされる分だけ、やりとりそれ自体で充足出来るから、敢て解答を必要とせず、従って、(と、ここでもかなり飛やくしていることを承知で言わせてもらえば)いつか、「答えのわかっていない問い」に出合い、「かつて問われたことのない答え」に、行きつくかもしれないのである。

何ともあれ今日、我々の内に「公用語による普遍化」に対する用心深さが芽生え、方言が復活しつつあり、その「肉声をやったりする現場」を必要としはじめた、ということは、結構なことには違いない。⁴ 現在、世界は混沌としている。各地で起きている事象に対して、何事かを発言しようとしても、どの立場でどのようなことを言うべきか、よくわからない。勢い、周辺に目を向けて局部対応をせざるを得なくなりつつあるのであるが、その「局部」の感覚の手がかりになるのが、方言ではないかと、私は考えている。

言うまでもなく私は、方言による地域ごとの鎖国を期待しているのではない。現実には、公用語（標準語）と方言（肉声）とが併用される二重構造、というのがあるべき姿のような気がする。ただし、近代において方言は痛めつけられ、半死半生の状態に置かれている。従って今日、その有効性に注目することを促したいと思っているだけである。

（注）ヴァレリー……ポール・ヴァレリー。フランスの文学者。

問一 傍線部 A・B にあたる漢字を含むものを、それぞれイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

傍線部 A	イ	ジョウ郭	ロ	ジョウ備	ハ	ジョウ造	ニ	ジョウ約	ホ	ジョウ渡
傍線部 B	イ	ヤク職	ロ	翻ヤク	ハ	ヤク動	ニ	ヤク束	ホ	ヤク用

問二 次の文は、本文中に入るべきものである。最も適切な箇所を イ へ から選び、その解答欄にマークせよ。

事実、言葉で伝達しようとした以上のものが、伝達されるのである。

問三 傍線部 1「私は「そちらの方言に直して上演したらどうですか」と提案した」とあるが、なぜか。その理由を説明している最も適切なものを、本文全体の趣旨を踏まえ、次のイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 戯曲「病氣」は、病気になるものの地域性をつよく意識して書いたものであり、その上演に方言は不可欠だから。
ロ 現代劇は方言を回復し、近代劇を乗り越えることによってしか、新たな世界を創出できないと考えるから。
ハ 自分の戯曲は、他の人の戯曲と異なり、地域独特な日常的なコミュニケーションを重視しているから。
ニ 地域の劇団によるその地域の方言での上演は、現代世界のありようを問い直すのにつながるから。
ホ 演劇は、上演される地域での言葉の通りのよさなくしては、その意義を存分に発揮できないから。

問四 傍線部 2「近代劇が厳しく方言を排除してきた」とあるが、なぜか。その理由を説明している最も適切なものを、次のイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 方言は、普遍化を妨げるから。
ロ 方言は、国際化を進めるから。
ハ 方言は、身体性を疎外するから。
ニ 方言は、地域性を抑圧するから。
ホ 方言は、都市化を促進するから。

問五 空欄 甲 に入る最も適切な語句を、次のイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 自主的規制
ロ 自律的回復
ハ 自己防衛本能
ニ 自国文化保護
ホ 自立経営推進

問六 空欄 乙 に入る最も適切な語句を、次のイ、ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ スピリチュアリズム
ロ アメリカニズム
ハ ファナティシズム
ニ グローバリズム
ホ モダニズム

問七 空欄

丙

に入る最も適切な語句を、次のイ～ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 文化的な独自性
- ロ 近代的な特殊性
- ハ 普遍的な公共性
- ニ 絶対的な他者性
- ホ 本来的な合理性

問八

傍線部3「いつか、「答えのわかっていない問い」に出合い、「かつて問われたことのない答え」に、行きつくかもしれない」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ～ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ それ自体で充足してしまう「井戸端会議」や「床屋談議」は、いずれ窮屈な自己完結性に反発し、まったく新しい世界へと進みでようとする者をうみだす可能性がある、ということ。
- ロ 「井戸端会議」や「床屋談議」は、参加する人によってその都度話題が大きく変化するので、ときには従来の問いと答えにはなかった新しい視点が加わる可能性がある、ということ。
- ハ 「井戸端会議」や「床屋談議」など地域毎の内密なコミュニケーションでは、従来の問いと答えを必要としないので、新たな問いと新たな答えをうみだす可能性がある、ということ。
- ニ テレビのスタジオ番組で公用語を話す著名人に反発してはじまる「井戸端会議」や「床屋談議」は、従来の自己充足性を打ち破り新たな問いや答えをうみだす可能性がある、ということ。
- ホ 肉声をやりとりする「井戸端会議」や「床屋談議」では、言葉は多義的にならざるをえず、そのなかから従来の問いや答えもあらわれる可能性がある、ということ。

問九

傍線部4「現在、世界は混沌としている」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ～ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 強大国による植民地が世界からほぼ一掃された現在、独立した国々の自己主張はばらばらで、それを調整する国際的な機関も機能不全に陥っている、ということ。
- ロ 世界は今、単一の価値観によって塗りつぶされているかに見えるが、実際はそれへの反発も強まり、むしろとらえどころのないものになっている、ということ。
- ハ 東西対立が消滅した冷戦後の世界では、従来の諸大国と新興諸国の勢力争いが世界中に新たな摩擦をうみだし、出来事に対する立場をゆさぶっている、ということ。
- ニ 地域のあつまりである世界は、もともと一つの考えでまとまりにくいものだが、特定の地域の突出がいちじるしい現在、いつそうまとまりを失っている、ということ。

ホ 近代には世界各地でおきる出来事を鳥瞰的に見渡す立場がありえたが、その解体してしまった現代において、世界はあいまいなものになっている、ということ。

問十

傍線部5「現実、公用語（標準語）と方言（肉声）とが併用される二重構造、というのがあるべき姿のような気がする」とあるが、どういうことか。それを説明している最も適切なものを、次のイ～ホの中から選び、その解答欄にマークせよ。

イ 方言が否定されてきた近代の歴史をみるにつけ、公用語の強制は許されず、方言の価値の見直しを進めて、公用語と方言の併用を早急に回復しなければならない、ということ。

ロ 言葉の地域的な鎖国状態を打破した近代の公用語の功績を忘れてはならず、「肉声」の回復はたしかに必要だとしても、併用という立場はつらぬかれるべきだ、ということ。

ハ 言語は抽象性と具体性、あるいは精神性と身体性の二者から成り立つものであるがゆえに、公用語の重視か方言の重視かという二者択一は原理的な観点からありえない、ということ。

ニ 近年、地域的かつ世代的な「方言」を回復しようとする運動が盛んになりすぎているので、その歯止めのために公用語と方言の併用が求められねばならない、ということ。

ホ 公用語による徹底した普遍化は地域性を見失わせ、他方で、方言による地域の過度な自己充足は排他的になりがちなので、両者のバランスのとれた併用が理想だ、ということ。

(二)

次の和歌と文章は、鎌倉時代の初頭に催された『六百番歌合』の、「蛙」題の一つの番（対戦）である。歌合は左方と右方の和歌を番えて優劣を争う文学的な競技で、相手方の歌への非難（難）と反論（陳）とが交わされた後、判者が理由を述べ（判詞）勝敗を定めた。これを読んで、あとの問いに答えよ。

左

顕昭

山吹の^{やまがき}にほふ井手をばよそに見てかひ屋が下も蛙鳴くなり

右

信定

まだ取らぬ早苗の葉ずゑなびくめりすだく蛙の声の響きに

右申してはいはく、「かひ屋が下、春寄せたる事いだが。『朝霞かひ屋が下に鳴く蛙』といふ本歌は、万葉集の秋の部にこそ入りたれ。朝霞と置けるは、春に限らず、秋も霞詠めること、万葉集にも多く見ゆるか」。

左陳じてはいはく、「蛙の題、古き撰集にも歌合にも、近代も皆、春の題に詠むなり。『かひ屋が下に鳴く蛙』と詠めるにつきて、蛙の題にかひ屋を詠まん、何の難かあらんや」。

また難じてはいはく、「蛙を春詠まん事は沙汰に及ばず。かひ屋を春詠まん事、疑ひ申すなり」。

また陳じてはいはく、「かひ屋といふ事、さまざまの儀あり。その中に、『田舎に蚕飼ふ屋をば、かひ屋といふ。その下に蛙、蚕を食はんために多く集まるなり。土民もこれをかひ屋といふなり』と申しき。その儀、違ふべからず」。

また難じてはいはく、「この儀ならば、蚕を飼ふ事は四月よりの事なり。しからば、春には不審の事なり」。

また陳じてはいはく、「かひ屋は、作りつれば、いつもさて置きたる物なれば、春も夏も、蛙その下に鳴きてん。蚕を飼ふ事、また三月にも皆する事なり。しかれば、相違あるべからざるか」。

左方申してはいはく、「右の歌、ことなる難なし」。

判じてはいはく、「左の歌、かひ屋が下に蛙鳴く事は、うちまかせたる事を、『かひ屋が下も』といへる²」の字、事新しく聞こゆ。『かひ屋と春詠めらんや』など、これらをだにおぼつかなく承るほどに、この左右の間答こそ、すでに³勿論の事と見えはべれ。まづ、かひ屋が下の歌は、万葉集に二首見えはべるをこそ、指南とすべき事にはべれ。その歌、一首は、『朝霞かひ屋が下に鳴く蛙声だに聞かば我こひんやは』、これ第十巻秋の歌の内なり。いま一首は、『朝霞かひ屋が下に鳴く蛙しのびつつありと告げん子もがも』、同じく第十六巻の内なり。これらの歌の心は、山田の庵に田を守る子ら、もとの住宅を離居して山中に居らしむるの間、蛙の声聞きて別居の慰めとせる心、⁴の歌なり。また、

かひ屋といふ心は、かの庵の下に火をくゆらかし、煙を多からしめて、あるいは衆蚊を払はしめ、もしは猿・雄鹿を去らしむるなり。しかれば、蚊・鹿においてはたとひ両儀ありといへども、煙炎にいたりては一決となすべし。しかるに、近古の輩、異説を出だしてはいはく、『河の淀みに木を入れ浸して、柴漬と称するは旧事なり。その上に屋を構へたるを、かひ屋となり』と云々。これなほ謬説なり。しかるに、今の問答には、春時、田舎に蚕を飼ふ屋を、かひ屋と称するとなり。そのところに蛙聚り来たりて、蚕を食ふなりと云々。この儀、すでに言ふに足らざるか。蚕養屋を蚕室とぞ申しはべる。これすなはち、俊頼朝臣書きてはべる物にも、玉簪の事を言へるところに、『春、初の子の日、玉簪をもて蚕養の法は、正月初子の日、子・午の歳生まるる女子を飼女と称して、蚕室を掻き払ひ、祝ひ初むるなり。次に二月午の日、初めて蚕の胤を出だして、暖日に暖めしめて、三月午の日、初めて桑につけて、四、五月を繭を引く時とす』と云々。かくのごとく、土民、貴重せしむるところの蚕室の内に、何ぞその用無き蛙を聚り入れしめて、蚕を施し与へしむべきや。いはんや蚕養の室内に、全く潺湲を掘るべからず。さらに池沼を湛ふべからず。蛙何によりて寄住せしむべきや。おほよそ、蝦蟇は、もとより荒所・水辺に寄住するものなり。しかれば、晋の惠帝、蟄を聞きしも、華林園といへり。橘清友が蛙を詠ぜしも、井手の里を指せり。漢家・本朝、蝦蟇の鳴く所は、皆、田園・水沢なりてへれば、かの万葉集の歌は、山中の田の庵、かひ屋が下に蛙鳴く事、もつとも相当の事なり。朝霞といへるも、夜煙の、澗際にそびける朝霞の山腰に廻れるに異ならず。よりて、かの歌等もつとも相かなふものなり。右の方人、蚕養ふ時の条は難じ申すべからざるか。もつとも蚕飼ひ屋を難じ申すべき事なり。左方申す旨、何の土民の境風か。もつとも停止あるべきの儀なり。右の歌、早苗の葉ずゑなびく心、よろしく聞こえはべり。もつとも勝ちとなすべきのみ」。

(注) 井手……山城国(今の京都府)の歌枕で、山吹と蛙で知られる名所。 土民……土地の民。

俊頼朝臣書きてはべる物……源俊頼著の歌学書『俊頼髓脳』のこと。

柴漬……水中で魚を集める仕掛けの名称。 潺湲……ここでは水の流れる溝の意。

橘清友が蛙を詠ぜし……「蛙鳴く井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」(『古今集』)の歌のこと。
潤際にそびける……谷の際にたなびいている。

問十一 傍線部1「蛙を春詠まん事は沙汰に及ばず」の意味として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 蛙を春の歌に詠み込む事自体を問題にしているのではない。
- ロ 蛙を春季に創作する歌に詠むのが適切だとは考えられない。
- ハ 蛙を春の主題として詠むことは正しい措置だとは言えない。
- ニ 蛙を春季に限って歌に詠むことが普通だとは考えられない。
- ホ 蛙を春のものと歌に詠み歳時記に登載したいわけではない。

問十二 傍線部2「『も』の字」とは何助詞か。最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 格助詞 ロ 間投助詞 ハ 係助詞 ニ 接続助詞 ホ 副助詞

問十三 傍線部3「この左右の問答こそ、すでに勿論の事と見えはべれ」の意味として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ これ以上左と右の和歌について質疑を重ねてみても、もはや決着はつけ難いように見えるのです。
- ロ この言葉の意味をめぐる左方と右方との論争は、まったく論外のことのように考えられるのです。
- ハ こうして左右がいつまでも非難応酬を続けても、解決の糸口は見出せないように思われるのです。
- ニ この番の左方と右方の言い分には、それぞれ当然と考えられる理があるように感じられるのです。
- ホ こういった左右相互の意見交換の場は、それなりに意義がないわけではないと評価できるのです。

問十四 空欄4に入る語として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 哀傷 ロ 戯笑 ハ 慶祝 ニ 相聞 ホ 旅中

問十五 判者はなぜ、傍線部6「右の方人、蚕養ふ時の条は難じ申すべからざるか。もつとも蚕飼ひ屋を難じ申すべき事なり」と述べたのか。その理由として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 事物の本質は時ではなく場所に現れるということ、右方は全く理解していなかったから。
- ロ 土民が営む産業について、貴族階級に属している右方の人知らないのも当然であるから。
- ハ 自然に触れる機会の乏しい右方の人々にとって、蛙の習性など机上の知識に過ぎないから。
- ニ 右方の非難は論点がずれており、言葉について判者は別の解釈が正しいと考えているから。
- ホ 源俊頼の著作などしっかりとした歌学の書物を読むことを、右方の人間は怠っているから。

問十六 問題文冒頭にある囲みの中の右の歌(信定Ⅱ実は慈円の作)について述べた文として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 縁語を多くちりばめた技巧的な歌である。
- ロ 句切れを挟み文脈が倒置された歌である。
- ハ 視覚と聴覚が融合する幻想的な歌である。
- ニ 掛詞の効果が十分に活かされた歌である。
- ホ 序詞が鮮明な映像を呼び起こす歌である。

問十七 本文の内容に合うものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 左歌の作者顯昭は、かひ屋について明確な知識を持たないまま歌を作ってしまった。
ロ 右方は、夏の景物である蛙が左歌で春季に詠まれていることに、疑問を呈している。
ハ 判者は、権威ある源俊賴の説を引用することで、この論争に決着をつけようとした。
ニ 左右の難陳は共に礼を失したものであったため、判者はその態度を厳重に注意した。
ホ かひ屋の語義について判者は、養蚕の施設とも魚を集める施設とも考えてはいない。

問十八 次の漢文は、問題文中の傍線部5「晋の恵帝、暮を聞きしも、華林園といへり」の典拠となる文章である。この漢文を読んで、あとの(1)～(3)の問いに答えよ(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)。

帝之為太子也、朝廷咸知不^{ランコトヲ}堪^ヘ政事。武帝亦疑焉。嘗^テ悉^ク召^{シテ}東宮官属、使以尚書事令太子決之、帝不能^ハ对^{フルコト}。賈妃遣^{ハシテ}左右代^{ヘテ}对^{ヘシム}多^ク引^ク古義^ヲ。給事張泓曰、「太子不^ル学^ハ、陛下所^ノ知^ル。今宜^シ以^テ事断^ズ。不^レ可^{カラ}引^ク書^ヲ。」妃從^フ之^ニ。泓乃具^チ草^{シテ}令^ム帝書^カ之^ヲ。武帝覽^テ而大悦^ニ。太子遂安^シ。及^レ居^{ルニ}大位^ニ、政出^ヅ群下^ニ。綱紀大壞^レ、貨賂公行^ス。勢位之家⁸、以貴陵物、忠賢路絕^シ、讒邪得^{タリ}志^ヲ。更相薦^ビ舉^ス。天下謂^フ之^ヲ互^ト市^焉。へ中略帝又嘗^テ在^{リテ}華林園、聞^ク蝦蟆聲^ヲ。謂^{ヒテ}左右曰^{ハク}、「此鳴者為^レ官乎、私乎。」或^{ヒト}对^{ヘテ}曰^{ハク}、「在^{リテハ}官地^ニ為^レ官、在^{リテハ}私地^ニ為^レ私。」及^ビ天下荒乱^{スルニ}、百姓餓死^ス。帝曰^{ハク}、「何不^ル食^ハ肉糜。」其蒙蔽^{ナルコト}皆^ノ此類也。

〔晋書〕より

(注) 帝……晋の恵帝。 武帝……恵帝の父。 東宮……太子。 尚書……官名。 賈妃……太子の妃。

給事……官名。 具草……草稿を書く。 讒邪……よこしまな人。 肉糜……肉入りの粥。 蒙蔽……愚かな。

(1) 傍線部7「使以尚書事令太子決之」に返り点を付す場合、最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ
ロ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ
ハ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ
ニ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ
ホ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ
ヘ 使^下以^ニ尚書事^ヲ令^テ太子決^ス之^ヲ

(2) 傍線部 8 「以貴陵物」の意味として最も適切なものを、次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 地位をかさに人民をいじめる。
- ロ 地位をかさに良貨を独占する。
- ハ 一族の墓地の規模を大きくする。
- ニ 一族の墓地で派手な祭祀をする。
- ホ 市場の商品の値段を吊り上げる。
- ヘ 市場の商品の値段を自在に操る。

(3) 傍線部 9 「此鳴者爲官乎、私乎」から、なぜ恵帝が愚かであると分かるのか。その説明として最も適切なものを、次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 官有地の蛙は官のために、私有地の蛙は個人のために鳴くということが分かっていないから。
- ロ もともと公も私もないはずの蛙の鳴き声について、公のためか私のためかと質問しているから。
- ハ 皇帝専用の庭園の蛙である以上、自分のために鳴いているに違いないと思ひ込んでいるから。
- ニ 華林園が官有地なのか私有地なのかという最も基本的なことさえ分かっていないから。
- ホ 華林園の蛙が皇帝のために鳴いているのなら、蛙に官職を与えようと考えているようだから。
- ヘ わざと答えの出にくい難問を出して、左右の者たちを困らせて喜んでるように見えるから。

〔以下 余 白〕